

都市インフラ調査研究・ヨーロッパA

Grant ID S3RR12001
Research representative: 伊藤毅

1. 研究概要

本研究は都市のインフラストラクチャー（以下、「都市インフラ」）の類型論的・地域史的比較を試みながら、都市インフラ概念の深化と拡大を推し進め、現代都市がかかえる喫緊の諸問題に対し、関連する専門分野の先端的な知見を統合するかたちで一定の寄与を行うことを目的とする。

21Cに入り直面しつつある都市の問題群の背景のひとつは、都市をさまざまなレベルで下支えする基幹施設である都市インフラ（社会資本、エネルギー研究、社会関係資本などを含む）の問題として焦点化することが可能である。しかし都市インフラの歴史・文化的側面や政治・社会的側面の研究は著しく遅れており、建築史・都市史・土木史などを有機的かつ緊密に連携する方法と場の共有が俟たれている。

以上の研究の趣旨のもと、昨年度に引き続き、建築学専攻建築史研究室、都市工学専攻都市デザイン研究室、社会基盤工学景観研究室、また他大学を含む西洋建築史、西洋史学研究者らのメンバーからなる「沼地研究会」の活動を行ってきた。なかでも、同研究会の一部会である「オランダ沼地研究会」は、オランダ・フリースラント州諸都市の調査研究を主体に、論文購読・資料収集・現地調査などを共同で行うものである。

2012年度には月例の研究会とそれに向けた準備会、さらにフリースラント州諸都市の現地調査と現地でのラウンドテーブルを行った。また、フランスとイタリアをそれぞれフィールドとする研究会との合同研究会（合同沼地研究会）での発表や、国際シンポジウム等での発表・運営にも関わった。

本報告書では主としてオランダ沼地研究会の現地調査に関する内容・結果・分析について記述する。今後は研究成果のアウトプットを目的とし、論文発表・出版のために活動を継続する。それに際し必要な、文献の輪読・関係諸論文の勉強会、調査結果の分析・検討を行っていく予定である。また、現地での補足調査も検討している。

なお本報告は、伊藤毅 (1, 2.1)、宮脇哲司 (1, 2, 3.1.1-2、編集)、高橋元貴 (3.1.3, 3.4)、小島見和 (3.2.1-4)、中尾俊介・松本純一 (3.2.5)、福村任生 (3.3)、向山裕二 (4) が作成した (括弧内は本報告書の担当した章・節・項番号)。

2. はじめに

2.1 研究趣旨

本研究会が称する「沼地」とはひろく水と陸の中間形態とも言える低地・低湿地の一般を指し、研究会の主たる関心はこうした地理的あるいは自然的条件と、テリトリー・都市・集落・建築といった空間的媒介によって人類が結んできた関係史の理解にある。以下では、本研究が射程とする4つの主論点について記述する。

2.1.1 都市インフラ論

本研究は歴史的・複合的観点に基づく「都市インフラ」概念の拡大と深化を目的としている。ごく普通の人々が住む身近な住宅地の風景から、道路・鉄道・エネルギーを経て、地球規模の陸地と水にいたるまでを考察の対象に加えながら、新たな都市インフラ論の構築に寄与することを目指す。

ここでは都市インフラを以下のような諸側面からなるものとして捉えている。

(1) 都市インフラの物理的側面

- 骨格：地盤（沼地干拓・埋立・地下・人工地盤等）、地形、港湾、軍事施設など
- 循環：交通（街路・道路、鉄道、水路・運河等）、エネルギー供給（薪炭、油）、上下水道など
- 組織：建築・敷地、空地、街路、街区、地区などの都市組織全体

(2) 都市インフラの文化的、政治・社会的側面

- 社会的共通資本、社会関係資本
：コミュニティ、教育、治安、文化など

以上の目的に基づき、オランダ沼地研究会では特に都市と水の関係から生じる、前記広義の「都市インフラ」について着目し、研究を進めている。

2.1.2 小規模都市論 — 「一群の都市」論

産業革命以後、爆発的に規模を拡大したメガシティと呼ばれるような大都市ではなく、比較的小規模なままで拡大せずに都市域を維持してきた都市を、研究対象としていかに焦点化するかにについて、本研究を通じて思考したいと考える。メガシティがその巨大さゆえに多くの行き詰まりを抱えている現代において、小規模都市のありようは、これからの都市のあり方について考えるうえでも多くの示唆を与えてくれるだろう。

ここで我々が想定しているのは〈一群の都市〉という概念である。その研究対象地に、オランダのフリースラント州11都市 (Elf Steden) を選んだ。11都市として括られるのは、Leeuwarden (以下、レーワルデン)、Sneek (スネーク)、IJlst (エイルスト)、Sloten (スローテン)、Franeker (フランクネル)、Harlingen (ハーリングン)、Bolsward (ボルスワルト)、Stavoren (スタフォーレン)、Hindeloopen (ヒンデルローペン)、Dokkum (ドックム)、Workum (ウォルクム) の11である。フリースラントとは、北海に面し、アイセル湖をはさんで北ホラント州と向かい合うオランダ11州のひとつである。フリースラント州は唯一にフリジア語を公用語とし、人々は少数民族フリース人として他と区別されるなど、文化の面で他地域と一線を画している。また、オランダの利水技術の起源として位置づけられる、テルプ (terp、人工的な微高地上の集落) が、現在も数多く存在することは特筆に価する。そして、フリースラント11都市とは、中世期に都市特権を獲得し、歴史的に政治・商

業等、様々な点でフリースラントの基盤となった都市群であり、現在に至るまで他の集落とは区別されている。

これらは歴史的に繋がりを形成してきた都市群であり、都市的機能を様々に分担しながら発展してきた経緯がある。一方で個々の都市は、歴史、文化、言語においてそれぞれの多様性を保持している。フリースラントの諸都市がその規模を小さいままに維持し、かつそれぞれの個性を持続させていたことと都市間の繋がり、ネットワークのありかたに注目している。我々はフリースラント州 11 都市にみられるこのような姿について〈一群の都市〉というキーワードとともに取り上げ、検討してみたい。この都市間ネットワークを担保しているものこそは、すでに述べたとおり「都市インフラ」である。

これまで都市史研究が個別の都市ないし都市内の地域を対象としていたのに対し、複数の都市をひとまとまりに対象化することで、都市という個別のものの領域から、都市相互の関係性へと視点を転換させることを狙っている。そして都市それぞれの機能分担のありかたや、都市間の類似性あるいは差異の論点化を目指すものである。

2.1.3 テリトリオ論

本研究は当初、都市インフラ論、都市の群生論としてスタートしたが、昨年度来、議論をさらにもう一段階、展開・止揚するために、「テリトリオ (territorio)」という概念を導入するにいたった。

「テリトリオ」とは「領域・地域」を意味するイタリア語であり、1960 年代以後のイタリアで、建築・都市・修景を扱う学問領域において対象化され、鍛えられてきた概念である。とくに急速にその姿をかえつつあった地方の風景 (パエサッジオ paesaggio) を保存し修復整備するための地域計画の範囲設定という必要性から登場し、いまやイタリアをはじめ西ヨーロッパの地域計画ではテリトリオあるいはテリトリーという語はごく普通の言葉として定着している。

われわれの都市インフラと都市の群生という視角にもすでに一定の領域的広がり前提されていたが、いま振り返るとその領域は単なる漠然とした地理的広がりとしてイメージされているに過ぎなかった。そこでイタリアで開発・展開したテリトリオ概念が参照されることになったが、本研究におけるテリトリオとは、イタリアにおけるそれと必ずしも意味を同じくするものではない。

ここでテリトリオという語にわれわれが仮託しようとしているのは、これまでの国内外の研究・現地調査におけるフィールドワークのなかで培われ、とくに「沼地」を対象とするオランダ・イタリア・フランスの研究活動の流れのなかで、いわば必然的に到達した自律的な概念としてのテリトリオである。

テリトリオという概念をわれわれは独自に以下に示すような諸点から構築しようとしているが、その方法論はまだ緒についたばかりで未熟である。しかし、従来の建築史や都市史、単体としてのモニュメントを一度テリトリオという広がりの中で再定義し、ふたたび建築や都市へと回歸してゆくために必ず通過しなければならない、方法論上の不可避のプロセスと考えている。

テリトリオを対象とするにあたり、その枠組と研究方法として以下の問題群を現在検討している。

(1) テリトリオの枠組

- 大地性：大地領域（大地・沼地・沿海・島・水）を対象とする。

- 居住性：居住域・活動域を中心とした対象設定。
- 成層的空間：大地 - 利用 - 景観という成層性に立脚。
- 歴史性：自然的变化、人為的变化が重合する不可逆的な時間推移を備える。
- 統合的環境：物理的環境（地形、構築物等）と人文・社会的環境の統合。

(2) テリトリオ研究の方法（問題の所在）

- 図と地：「図」（一般的な都市組織）に加え、「地」（地形・地層、沼、災害、土地利用等）の対象化。
- 分節：テリトリオを多様に構成する分節・切片（セグメント）の発見、その歴史的動態の解明。
- 結節：分節群の間の関係・配列・群性の歴史的考察、テリトリオへの結節・統合の構造的な理解。
- 部分と全体／内と外の再定義。
- 社会＝空間構造論としてのテリトリオ研究。

(3) テリトリオとしてのモニュメント

モニュメントはテリトリオの一切片というよりは特異点というべき存在であり、その総合性からみて、もうひとつのテリトリオであるといえる。モニュメントは語の本来的な意味からして、時代の記念性やアイデアを纏いつつ登場するが、その位置づけは時代とともに変化し、その歴史的経緯はモニュメントの成層として現象する。モニュメントの立地や外観、使われる素材や意匠・技術はそれを取り巻く施主はもとより建築家・技術者集団・地域の社会集団などと深く関係し、いわば一つのテリトリオを形成している。宗教的モニュメントにはとくにその性格が顕著にあらわれる。

以上のような問題意識をもちつつ、かつ建築史・都市史のフィールドワークのなかであくまで現地に即する論理構築を行うことを目指す。

2.1.4 国際的比較都市史研究 16C-19C

本研究は 16C-19C の水と都市を主題とした国際比較都市史研究の一貫でもある。比較研究は、オランダ・フランス・イタリア・日本の諸都市をフィールドに、都市空間と都市インフラの関係の読み取り、低地の開発・制御を核としたものである。この目的のため、フランス沼地研究会とイタリア沼地研究会が 2010 年度より活動しており、それぞれの構成員が一同に会する合同沼地研究会において、各研究会間の緊密な連携と情報共有を行っている。また、それぞれの研究会の構成員は、建築史・都市史のみならず、西洋史、経済史など、多くの専門家からなっており、各分野の専門知を結集しつつ、学際的連携を図っている。

2.2 研究会活動

オランダ沼地研究会は月に一度の本研究会と、必要に応じ適宜行われる準備会とからなる。2012 年度の主な活動内容を次項に記す。また、昨年度に引き続き、フランス・イタリア・オランダ・日本をフィールドとする各研究会の連携を図る合同沼地研究会を開催しており、その次第を 2.2.2 に記す。さらに 2012 年度が調査・研究の最終年度ということもあり、本年度は積極的にこれまでの研究成果を発表すること、さらにはこれからの研究の可能性を模索することも意図したシンポジウム等の実行に関わった。これらについて、2.2.3-5 に記す。

2.2.1 オランダ沼地研究会

①調査図面の CAD データ化（2011-2012 年度現地調査）

- ②ヒアリング・古写真・実測図面など現地調査で得た住宅・街区・都市調査結果に関する検討と分析
- ③都市の絵図（16-17C）、地籍図（1832 年、1887 年）、センサス・財産史料（18・19C）を用いた分析
 - 都市のマクロな空間構成に関する考察
 - 都市の形成過程に関する分析（15C 以前に関する復元的考察、16C-現代の史料に依拠した分析）
 - HISGIS（地籍台帳のデジタルアーカイブ）による土地所有形態に関する分析
 - 地籍図とセンサス史料による、18・19C フリースラント諸都市における社会＝空間構造に関する分析など
- ④先行研究、広域地誌図、atlas 資料を用いた分析
 - フリースラント広域の地勢形成史
 - 領域構造とインフラ類型の考察
 - 地質構造と集落類型による領域の考察
- ⑤文献レビュー（フリースラント史・各都市史・オランダ建築史・絵地図史・水系組織史・技術史等）

2.2.2 合同沼地研究会

第 4 回合同沼地研究会

日程：2012 年 4 月 1 日

会場：東京大学工学部一号館 3 階会議室

次第：

- 伊藤毅（建築学専攻）
「〈領域史（テリトリオ）〉の視点メモ」
- 福村任生（建築学専攻 伊藤研究室）
「イタリア沼地研究会 ヴェネト地方中部のテリトリオ研究紹介」
- 東辻賢治郎・小島見和（建築学専攻 伊藤研究室）
「フランス沼地研究会 2011 年度調査報告」
- 松田法子（建築学専攻 伊藤研究室（当時））
「新潟調査報告」
- 高橋元貴（建築学専攻 伊藤研究室）
「フリースラントのテリトリオ オランダ・フリースラント沼地研究会活動報告」

2.2.3 国際ラウンドテーブル・レーワルデン

「Territory and Urban Settlement along Water: Comparative Studies on Friesland and Other Areas in History」

日程：2012 年 9 月 18 日

会場：Orange Hall, Municipality Hall, Leeuwarden

主催：Province of Friesland / Society for the Study of Lowland, Water, Territory and Urban History

次第：

- Ferdinandus J. M. Crone（Mayor of Leeuwarden）
[Welcome Remarks]
- Takeshi Ito（The University of Tokyo）
[Introduction]
- Gilles de Langen（Province of Friesland, University of Groningen）
「The Structure of Settlements Related to Land and Water」
- Johannes A. Mol（Fryske Akademy Leeuwarden, Leiden University）
「The Frisian Towns as Centres of Religion in the Late Middle Ages: Parish Churches and Convents」
- Miki Sugiura（Tokyo International University）
「Evolution of Urban Networks of Friesland: A Disintegration?」
- Genki Takahashi（The University of Tokyo）

「Studies of the Socio-spatial Structures in Early Modern Frisian Cities: Case Study in Bolsward」

- Satoshi Miyawaki（The University of Tokyo）
「Urban Territory in Friesland: Focusing on Dokkum」
- Mina Kojima（The University of Tokyo）
「Housing Types in the Eleven Cities」
- Kazue Akamatsu（The University of Tokyo）
「Territorial Control of the Arno Basin and Villa Ambrogiana in the Late Sixteenth Century in Tuscany」
- Tomoaki Nakashima（Kogakuin University）
「The Suallem Family and the Origins of Their Hydraulic Technology of the Water Supply of Versailles Gardens」
- Sandra van Assen（Province of Friesland, Delft University of Technology）
「Future Use of Cities with Water」
- Discussion

2.2.4 国際シンポジウム「歴史都市の空間・文化・持続再生 都市インフラおよび〈領域〉的視座の国際比較」

「Space, Culture, and Regeneration of Cities in History From the Viewpoint of International Comparison of Territory and Infrastructure」

日程：2012 年 12 月 3-4 日

会場：東京大学工学部一号館 15 号講義室

主催：Society of Urban and Territorial History

発表（オランダ沼地研究会関係発表のみ抜粋）：

- Gilles de Langen（Province of Friesland, University of Groningen）
「On the Origin and Shape of Medieval Villages and Towns in Friesland, the Netherlands: The Settlement Structure of Leeuwarden 450-1435 AD.」
- Miki Sugiura（Tokyo International University）
「Small Cities in the Marshland: Reconsidering Urban Networks of Friesland 1500-1800」
- Hans van Meerendonk（Province of Friesland）
「International Collaborative Activities in Friesland」

2.2.5 都市史研究会シンポジウム「沼地と都市」

日程：2012 年 12 月 15・16 日

会場：東京大学工学部一号館 15 号講義室

主催：都市史研究会・とらっど 3

発表（オランダ沼地研究会関係発表のみ抜粋）：

- 高橋元貴（建築学専攻 伊藤研究室）
「近世オランダ・フリースラント小都市の社会と空間」
- 宮脇哲司（建築学専攻 伊藤研究室）
「オランダ・フリースラント、低地地域における都市形成」

3. 2011 年度フリースラント実測調査

3.1 第 5 回フリースラント 11 都市調査概要

2011 年度までに行った調査に引き続き、本年度も現地調査を行った。本項は以下のように基本情報を整理するものである。また、次項・次々項では、本年度調査の対象であったレーワルデン、スネークについて、事前準備として既往文献等から調べた情報に基づき、それぞれの都市の概容として、その略史を記述する。

3.1.1 調査の概要・目的・項目

(1) 期間・調査都市・参加者

期間：2012年9月17日～10月1日

調査都市：レーワルデン、スネーク

滞在都市：同上

参加者：伊藤 毅(建築学専攻 教授)

中島智章(工学院大学建築学部 准教授)

杉浦末樹(東京国際大学 准教授)

赤松加寿江(GCOE 特任助教)

宮脇哲司(建築学専攻伊藤研究室 博士課程)

高橋元貴(建築学専攻伊藤研究室 博士課程)

小島見和(建築学専攻伊藤研究室 博士課程)

福村任生(建築学専攻伊藤研究室 博士課程)

向山裕二(建築学専攻伊藤研究室 修士課程)

中尾俊介(建築学専攻伊藤研究室 修士課程)

松本純一(建築学専攻伊藤研究室 修士課程)

(※身分は当時)

(2) 調査目的

- 都市と都市インフラの関係性の究明
- 都市化の過程に関する史的分析
- 住宅の類型とその歴史的変遷に関する考察
- テリトリオ論によるフィールドワーク
- 各アーカイブでの史料調査

(3) 実測調査項目

- レーワルデン：住宅調査6棟／都市調査(街区類型)／地形測量／史料調査
- スネーク：住宅調査4棟(＋水門)／街区調査／地形測量／都市断面

(4) 他調査項目

- 史料調査：Oud Bolsward Archief、Tresoar、Historisch Centrum Leeuwarden
- 視察：スローテン、ハールリンヘン、エイルスト、マックム(Makkum)



図 3.1.1.1 レーワルデン航空写真(Tresoar 所蔵)



図 3.1.1.2 スネーク航空写真(Tresoar 所蔵)

3.1.2 調査都市概要－レーワルデン

本項は 主として以下の2冊の書籍に基づき、レーワルデンの都市略史を記述するものである。

- ・ Leeuwarden 700 jaar bouwen¹
- ・ Leeuwarden 750-2000 Hoofdtad van Friesland²

(1) レーワルデンの原初形態(－13C)

レーワルデンの都市としての起源は8世紀ころにまで遡るとされる。3本の川(Ee川、Vliet川、Potmarge川)が流れこむミッテル海の入江に面して、商業的性格の強い居住地が形成された。11世紀には、独自の硬貨が利用されていたことが確認されている。居住地の成立以来、その立地

から主要集落(Hoofddorp)として周辺領域の商業的中心であった。漸次的に求心性を増し、13Cには都市特権を取得、都市として機能するようになる。

レーワルデンが交易都市として機能するようになったこの集落は、Nijehove とよばれる Ee 川により南北に分断されたテルプ上に存在していた。なかでも、テルプの尾根道であり、南北に走るホーフストラート(Hoogstraat)に沿って、最も古い家並が形成されていたと考えられる。

Nijehove テルプより西側に離れた場所には、より古い時代に造成された Oldehove と呼ばれるテルプが存在する。こちらは Nijehove に比して、より農業的性格の強い居住地であり、ドイツ修道院の農場や、教区教会が存在していた。また、Nijehove テルプの東側には Hoek と呼ばれるテルプが造られ、これは主として有力家系であったカミンハ(Cammingha)家の所有地であった。

13世紀以前のレーワルデンは、これらの3つのテルプが統合されずに、個々の特色を持ったまま近傍に存在していた。

(2) 都市としての構造確定(13C－15C)

ミッテル海では13Cの終わり頃から自然堆積を利用した干拓が行われ、レーワルデンは海に面した都市ではなくなる。直接の海上交易からは遠ざかるものの、周辺領域の中心地であり続け、レーワルデンは地方都市として発展していく。Nijehove テルプが中心となり、Oldehove テルプと Hoek テルプ、それらの間を統合し、以後の近代都市としての都市域がこの頃にほぼ確定される。

14Cの終わりには、周辺領域をおさめるフリートマン(grietman)により、レーワルデンの都市としての裁判権が確認される。また、15C中庸までにはホラント伯により市場の開催が保証された。

都市内部に、有力家であるホーフデリンフ(hoofdeling: Minnema 家、Unia 家、Cammingha 家など)が大規模に土地を所有し台頭するようになるのもこの頃である。石造住宅であるステインズを建設し、所有する土地を市民に貸借する。彼らの所有する土地に家並が形成され、かつての粗放的な場所が多く残る集落的な場からより都市的な場へと、その構造に大きな影響を与えた。

15世紀の終わりには、Nijehove に運河が掘削され、さらに環濠が造成される。そして、計量所、マーケット(markt)、手工業、教会、修道院、行政施設、貴族住宅、労働者宅地、ザクセン公のブロックハイスなど、近世的な都市設備が次々に整備されていった。

こうして都市としての発展を果たしたレーワルデンは、1498年以後、フリースラントの首都となったのである。

(3) 都市の成熟(16C－18C)

宗教革命期には多くの建造物が破壊・更新され、堡壘・市壁・市門建築が17世紀初頭までに建設される。しかし、それ以前に成立していた都市の構造は概ね維持されており、市壁の造成による都市域の確定をもって、レーワルデンの都市構造は完全に確立された。続く17－18Cにおいて都市は、この時点までに確立した構造の中を充填・高密度化することで発展していく。

この時期の都市内部の密集化において、重要な役割を果たしたのは修道院と、首都として機能することに起因する貴族であった。建物が数多く建てられ、空地进行してくことに加え、彼らが運河や街道の建設・整備において重要な役割を担っていたと考えられる。

1 Drs. G.P. Karstkarel, *Leeuwarden 700 jaar bouwen*, Uitgeverij Terra, Zutphen, 1985.

2 *Leeuwarden 750-2000 Hoofdtad van Friesland*, Uitgeverij Van Wijnen, Franeker, 1999.

16C 中庸から約 200 年に渡り、オラニエ家がレーワルデンに居を構えていたこともまた、この時期のレーワルデンの発展に大きく関わっていた。レーワルデンの栄華は 18C 中庸に総督が主要貴族とともにハーグに移るまで続いた。それ以後、新たに大規模な建築物は造られなくなり、19C 以後には、近世都市としてのレーワルデン徐々に解体されていく。

近代化・現代化のなかで、州都レーワルデンはおおきく変化する。しかし、この時代までの都市の発展と栄華は現在においてもなお、よく保存されている。

3.1.3 調査都市概要－スネークの都市空間形成

スネークに関しては 2011 年に研究書 *SNEEK van veenterp tot waterpoortstad*³ (『スネーク：泥炭地のテルプから水門の都市へ』) が出版されている。これは編年的に構成され、宗教史・政治史・社会経済史・都市史・文化史といった学際的な通史といえる。ここでは上記文献およびいくつかの既往の都市内の考古学調査をもとに、都市の空間形成（おもに 16 世紀まで）について若干考察する。

(1) スネークの原初形態と都市形成

- ・微地形からみえる都市のかたち

現状の地形から想定されるテルプの形状は楕円形をしており、およそ南北方向に軸をもっている。教会南東部にはテルプから延びるかたちで微傾斜地がひろがっている。後に言及する考古学調査によれば、12 世紀にはすでにいくつかの家屋がこの地区に建っていたという。一方、北側の方はより広がったかたちで微高地が存在している。これは後述するヘムダイク (Hemdijk) の痕跡を示しており、建設年代は 12 世紀以降と考えられている。

- ・テルプの起源と造成 (9,10 世紀以前)

8 世紀終わりから 9 世紀のはじめころにはすでに現在の Grote Martinikerk (かつては修道院) が立地するテルプ 'podium' が存立していた。1975 年の教会西側の発掘調査によれば、このテルプは泥炭質の粘土によって盛土が行われ、修道院の周囲には堀が巡っていたことが明らかになっている⁴。またこの地区の最高点が Galigastraat 付近 (教会の地点から少し南東側) にあることは、教会南東部の居住地が、教会の立地するテルプ造成ののちふたたび盛土がなされたことを示している。

- ・居住地から都市的な場へ (10-12 世紀)

スネークは 9-10 世紀ころから居住地として発生していたと考えられるが、粘土層と泥炭層の狭間に立地するため地味が悪く、耕作地として開発するには限界があり、手工業や商業的な性格な場として発展していった。1998 年のマルティニ広場 (Martini Plain) と旧教会地 (Oud Kerkhof) の調査によれば、12 世紀ころの都市の境界は、南端が Scheidsteeg (旧 Wijkanstraat)、東端が Kronenburg、北端は後に東西にはしる Neltjeshaven 沿いであり、西端は現在の都市の堀であったという。また上記考古学調査では、南端付近 (現在の Oude Koemarkt 沿い) において 13 世紀ころ

の大量の皮革製品が出土した。また遺構としては 12 世紀に遡るものも発見されており、教会の南側に皮なめし業者が居住していたことを示している。

(2) スネークの水環境と都市形成

- ・原初的な水環境

具体的な位置はわからないが、スネークには泥炭河川 'Veenrivier' が南北に流れており、現在の都市西側の堀、あるいは南側から中央へと湾曲して流れる水路などがその原河川を改変して整形された流れと考えられる。これら二つは 9 世紀には北側に位置するミッテル海へと注いでいた。

- ・排水構造の転換－ミッテル海の堆積とヘムダイクの建設 (11-13 世紀)

11 世紀ころにおけるミッテル海の段階的な堆積は、スネーク周辺の水環境に大きなインパクトを与えていた。この堆積は都市南部から北側へと排水することを難しくさせた。またこの排水の困難さを助長したのが、都市南東部に広がる泥炭地の掘削・開墾による継続的な地盤沈下であった。南側の土地の高さが低くなることによって排水方向の転換 (北側から南側へ) の必要が生じることになった。

ヘムダイクは粘土地域に形成された環状堤防であり、スネークの都市内部 (北側) にはしっている。歴史的にいつ形成されたかは定かではないが、一般的には 12 世紀ころとされ、排水方向の転換や都市周辺の水環境の変化が中世末から近世初頭までの空間形成に大きな影響を与えたと考えられる。

- ・近世都市の空間と水路 (14-16 世紀)

都市東側や南側にみられる宅地郡はいずれも運河に直行するかたちの短冊型のものが多くみられ、都市の境界となる堀や水路の掘削と並行して都市拡張が行われた地区であると考えられる。少なくとも 1560 年の古地図では現在みられる都市形態は完成しており、以降の宅地開発 (都市の堀外も含めて) は 19 世紀末までみられない。

3.2 建築調査

3.2.1 調査対象建築概説

本年度は、フリースラント 11 都市の中で最も古い歴史をもつ州都レーワルデンと、運河ネットワークの結節点として発展した水門都市スネークにおいて 11 棟の建築実測調査を行った。調査開始以来、実測調査を行った都市は 8 都市に及び、棟数は総計 50 棟に上る。

建築調査は主にタウンハウスを対象とするが、本年度はレーワルデンにおいて石造で防御機能をもつ貴族の居館であるスティンズ⁵という建築類型と、スネークにおいて都市の防御施設であり重要なシンボルでもある水門を実測した。

3.2.2 各棟解説概要

以下に各建築のあらましを述べる。(図 3.2.2.1 参照)

凡例：建築年代／要約した建築の特徴／平面の特徴／ファサードの特徴／店舗など居住以外の用途の歴史

3 Meindert Schroor, *SNEEK van veenterp tot waterpoortstad*, Afûk, Leeuwarden, 2011.

4 考古学調査報告書としては Gemeente Sneek: Nieuwbouwplannen Oude Koemarkt -Martiniplein : waarderend archeologisch onderzoek.RAAP-rapport,310,1997、Een middeleeuws leerbewerderskwartier in Sneek. Een archeologische opgraving aan het Martiniplein te Sneek, gemeente Sneek (Fr.), Groningen, 2006、De Waltastins, van Stins tot Stadhuis. Een archeologische begeleiding (AB) van een verbouwing van het stadhuis te Sneek, gemeente Sneek (Fr.), Groningen,2007などを参照。

5 防御機能を持つ館。在地有力者であった hoofdeling (富農と訳されることもある、集権的権力不在により台頭した者) たちにより、12 世紀半ばからフリースラント内戦期にかけて各地に建てられた。内戦期には、そこに逃げ込んで人命や財産を守る機能を持っていた。都市内の Stinz と、農地の中に建つ Stinz とある。

Leeuwarden



① Grote Kerkstraat 238



② Voorstreek 36



③ Eewal 76



④ Eewal 60



⑤ Eewal 58



⑥ St. Jacobstraat 13

Sneek



⑦ Waterpoort



⑧ Singel 55



⑨ Hoogend 24



⑩ Kleinzand 60



⑪ Grotezand 39A

①Leeuwarden, Grote Kerkstraat 238

地下部分は 14 世紀初め、地上階部分⁶は遅くとも 16 世紀初め／中世の要素を残す都市最古級の建築であり防御に重きを置いたスティンズ／平入、2 室中廊下型、地階プランは 16 世紀初めのもの。地下室のヴォールトは中世的要素。／階段を上って地階部分玄関にアクセスする。玄関は中央よりやや左寄り。大きいレンガ（修道院レンガと呼ばれる古い規格のレンガ）積みで、玄関の左側、地階の窓の下などに埋めた小さな窓アーチの痕跡。

②Leeuwarden, Voorstreek 36

16 世紀、史料上初出は 1571 年⁷／都市の主運河に面する街区の中で最初に建てられた中世的要素を残す住宅／周辺の住宅と間口寸法が異なり、元々路地だった場所に増築している。元は階段室が外についており、L 字型のコンプレックスだったものが 16 世紀末と 17 世紀初めに分割されたうちの一部分。／寄棟コーニス。ファサードは新しい。玄関は増築前部分の左寄り。／地主の Cammingha 家がこの周辺の宅地を職人や商人に与えた（貸した）。当住宅は 16 世紀の貴族住宅と共通する要素を備えており、16 世紀にはフリースラント州政府高官が住んだ。19 世紀にはコーヒーハウスの所有者が住んだ（店舗に利用していたかは現時点では不明）。

③Leeuwarden, Eewal 76

1611 年／屋敷地外縁を 3 軒同時開発したタウンハウス／中庭と廊下を挟んで奥行き方向に 2 棟がつながっている、奥行 2 倍型／寄棟コーニス。地階の窓と玄関ドア上部に古いアーチの痕跡、玄関は右寄り。／17、18 世紀は州政府や王家の代官関係、司法関係などの有力者の住宅。19 世紀以降、仕立屋や小売商人の店舗兼住宅、公証人のオフィス兼住宅、アンティーク商などに使用された。

④Leeuwarden, Eewal 60

1619 年／隣とともに 2 軒同時開発したタウンハウス／現在は 3 室片廊下型であるが、元は玄関を入った前部が住人である職人の作業場であり、後部が居室、前後の間にベッドルームがあった。／寄棟コーニス。地階と 1 階の窓と玄関ドア上部に古いアーチの痕跡、玄関は右寄り（元は中央）。／職人や商人の作業場、店舗兼住宅。

⑤Leeuwarden, Eewal 58

1619 年／隣とともに 2 軒同時開発したタウンハウス／玄関を入ってすぐの部分が 1.5 階分の天井高をもつステップフロア型。／寄棟コーニス。地階と 1 階の窓と玄関ドア上部に古いアーチの痕跡、玄関は中央。1 階の正面に聖ヤコブ像。／レンガ職人の作業場兼住宅。近年ドックムの市長が居住した。

⑥Leeuwarden, Sint Jacobstraat 13

1635 年⁸／大きい屋根裏と地下室をもつ高層の印刷業者の工場／元は 3 室片廊下型の前部に店舗または作業場が付属していたと推定される。／1635 年のイオニア式とコリン

6 フリースラント調査における建築調査では、一貫して日本では一般に「1 階」と呼ぶグラウンドレベルに相当するフロアを「地階」または「GF」と呼び、その一つ上の階、日本では通常「2 階」と呼ぶフロアを「1 階」または「1F」、屋根裏の空間を「アティック」「AF」と表している。これは英語表記との共通性を考慮してのことである。

7 本項及び 3.2.4 (2) で述べるレーワルデンの住宅調査と史料入手、読解方法については、今年度調査において現地で我々が知遇を得た Leo van der Laan 氏（レーワルデン市の歴史的モニュメント保存と修復の専門家）と Henk'Oly 氏（Histrisch Centrum レーワルデン、レーワルデン市の文書館のアーキヴィスト）の協力和助言に依るところが大きい。特に Oly 氏は、レーワルデンの多くの住宅の歴史に精通し、課税調査記録、売買記録、財産目録などから独自に各住宅の居住者一覧を作成・研究しておられ、そのデータを快く我々に与え読解方法についても御教示下さった。文書史料の読解と分析は今後順次進めていく。

8 当建築の現在の所有者は Hendrick de Keyzer (HDK) というオランダの歴史的住宅保存協会であり、当建築は歴史的モニュメントとしてのケアを受けつつ、地階部分は衣料品の店舗として貸されている。本項で述べる当建築に関する年代や所有者の歴史は、すべて HDK より提供された資料に基づいている。

ト式のピラスター付ゲブル、ゲブル頂部は 1706 年のルイ 14 世スタイルの装飾。玄関は現在中央にあるが、オリジナルは左寄りであったと考えられる。／17 世紀には印刷業者が建てた印刷の工場、店舗、兼住宅、後に薬局。18 世紀にはかつら屋、19 世紀にはパン屋、ケーキ屋の店舗兼住宅。

⑦Sneek, Waterpoort

1613 年(80 年戦争中に建設)、水門上の屋根架構は 1758 年／都市の防御施設であり重要なシンボル／水門の開閉はスチールワイヤーによる。／2 つの塔をもつ、ルネサンススタイル／門衛とその家族が水門の上階に住んだ。

⑧Sneek, Singel 55

後部は 1616 年以前⁹、前部は 1631 年／オリジナルの痕跡がよく保存された、ファサードに小口レンガの古い積み方が残るタウンハウス／一見地階平面は 3 室片廊下型だが、前部と後部で建設年代が異なることと、前部の床が少し高く後部が下がっていることから、ステップフロア型の要素を若干もっているとも考えられる。後部の暖炉のタイルは 17 から 18 世紀のオリジナル。／元はステップゲブルであったが、寄棟コーニスに変更された。地階と 1 階の窓と玄関ドアの上に古いアーチの痕跡。ファサードに小口が見えるレンガの積み方¹⁰。玄関は左寄り。／現時点では過去の居住以外の使用については不明。

⑨Sneek, Hoogend 24

1600 年前後か。特に側壁は古く 17 世紀以前／運河に面するパン屋の工場・店舗兼住宅、店舗兼住宅型タウンハウスの典型例／3 室片廊下型。玄関を入った部分の廊下がやや幅が広いのは、そこを店舗として利用していたことによる。地階後室部分にはパン焼きの大きなストーブが設置されている。／ステップゲブル。1 階とアティックの窓上部に古いアーチの痕跡。1 階の窓の間に 1659 年の年記と鉋やコンパスなどの桶職人を意味するレリーフ。玄関は中央よりやや右寄り。／1659 年時点では桶職人の作業場兼住宅。18 世紀は不明だが、19 世からバター職人やパン職人の工場・店舗兼住宅だった。

⑩Sneek, Kleinzand 60

ファサードの銘によると 1790 年／ファサード部分のみ高層の看板タウンハウス／奥行 2 倍型。前後屋ともに各 3 室片廊下型で、それが中庭と廊下を介してつながっている。後屋のほうが古い可能性がある。／入母屋コーニス。前屋の最上階部分のファサード寄りの部分のみ背が高く、飾り破風や花綱装飾をもつ。ファサード部分のみ背を高く立派にみせる、看板的要素が特徴。玄関は右寄り。／現時点では過去の居住以外の使用については不明。第二次大戦後に計 4 家族が同時に居住していたことがある。

⑪Sneek, Grotezand 39A

19 世紀／アール・デコ風のデザインによるセミデタッチトハウス／地階には玄関、廊下、階段のみで、1 階とアティック部分に居住。1 階平面は元々 3 室片廊下型に概ね合致し、廊下部分の前後にキッチンやユーティリティースペースが設けられていた。／マンサード屋根。6 単位の間口のうち、地階は向かって一番左側の 1 間口と 1 回の左側 3 間口分が調査住宅。地階の左側 2 間口側分と、地階からア

ティックの右側 3 間口分はそれぞれ別の店舗になっている。／かつて地階部分は女性用帽子屋に貸され、1 階以上に別の家族が居住した。

3.2.3 2011 年度以前の調査建築と比較して—地上階平面による都市住宅の 7 類型—¹¹

2008～2012 年度にわたる 4 ヶ年の調査における建築実測を通じて、以下に挙げる A. から G. の都市住宅の 7 つの類型(図 3.2.3.1)が見出された。これは我々の実測結果に基づく仮説的な類型だが、アムステルダム・タウンハウス研究、フリースラントにおける歴史的建造物調査報告などの先行研究と比較することにより、ある程度の妥当性が保証されている。

まず、フリースラント都市住宅は、基本的に 5 メートル四方から 7 メートル四方程度の正方形の室を基本単位とし、それに幅員 0.8 から 1.5 メートル程度の廊下、螺旋階段または急な直線階段、ユーティリティースペースが組み合わさっていると理解できる。

次に、7 類型それぞれの派生関係や大凡の成立時期について、先行研究を参考にしつつ述べる。A.B. は 16 世紀以前のタウンハウス成立以前の形式であり、オリジナルの状態で残るものが少なく不明点も多いが、アムステルダムのタウンハウス研究¹²によると A. 1 室型(14 世紀)から B. 2 室型(15、16 世紀)へと移行したものとされる。また、同じ研究によれば C. 3 室片廊下型は、B. から移行した 17 世紀以降のタウンハウスの基本的典型例であり、我々のフリースラント都市における建築調査で最も多く採取されたサンプルである。D. 間口 2 倍型や E. 奥行 2 倍型は、C. のヴァリエーションであると考えられるが、ともに C. より建築面積が大きく、住人の社会的地位が高く経済力が大きい場合が多い。F. は C. と同じく 17 世紀初めのタウンハウス成立期の形式と考えられ¹³、調査住宅の建築年代を比較すると、あるいは C. より古い類型かもしれない。前室と後室のフロアレベルが異なるため、C. に比べて作業場や店舗の独立性が高く面積が大きく、より高密度が進み商工業専門職が大きく商いを行う都市にみられると考えられる。G. は A. から F. のタウンハウスの類型とは根本的に異なる類型である。中世にまで遡る古い起源をもつと考えられる。

A. 1 室型

妻入、奥行が比較的浅く、ファサード中央に入り口がある。ドックム(2011 年度調査)やエイルスト(2010 年度調査)などでこの類型と推察されるものがみられた。

B. 2 室型

妻入、前室後室の間に螺旋階段または直線階段がある。片側に廊下が背面まで貫通する場合もある。各年度調査で数件ずつみられた。

C. 3 室片廊下型

妻入、片側廊下が前面から背面まで通り、その横に前後 2 室、中間に階段とベッドルームが位置する。ファサード付近の廊下の幅員が少し拡がっており、かつてはそこを店舗として利用した例も多い。フリースラント全都市において普遍的に多くみられた。前項の⑥、⑨が具体例。

9 1616 年のスネーク都市絵図に、現存する後部と推定される建築が描かれていることによる。なお、この情報をはじめ、当住宅の細部に関する様々な情報は、現在の所有者であり居住者である Arnold Blikman 氏の御教示によるところが大きい。氏は歴史的建造物の保存・修復の専門家であり、当住宅に居住しながら後世の改変を除去し、オリジナルの部分を発見、保存、あるいは改変の過程を明らかにする作業を続けている。

10 17 世紀のレンガの積み方の特徴である。Koos Steenhouwer & Herman Janse, *Bouwgeschiedenis van monumenten*, Stichting Open Monumentendag, Amsterdam, 1992, pp. 17-18.

11 本項は、Mina Kojima, « Housing Types in the Eleven Cities » *Territory and Urban Settlement along Water* (2012 年 9 月 18 日にレーワルデンで開催された国際ラウンドテーブルのプロシーディングス), pp. 31-38 に基づき、今年度建築調査の結果を加味し再考したものである。

12 Herman Jande, *Amsterdam gebouwd op palen*, Ploegsma, Amsterdam, 1993, pp. 82-83.

13 H. J. Zantkuil, *Bouwen in Amsterdam*, Architectura & Natura, Amsterdam, 2007.

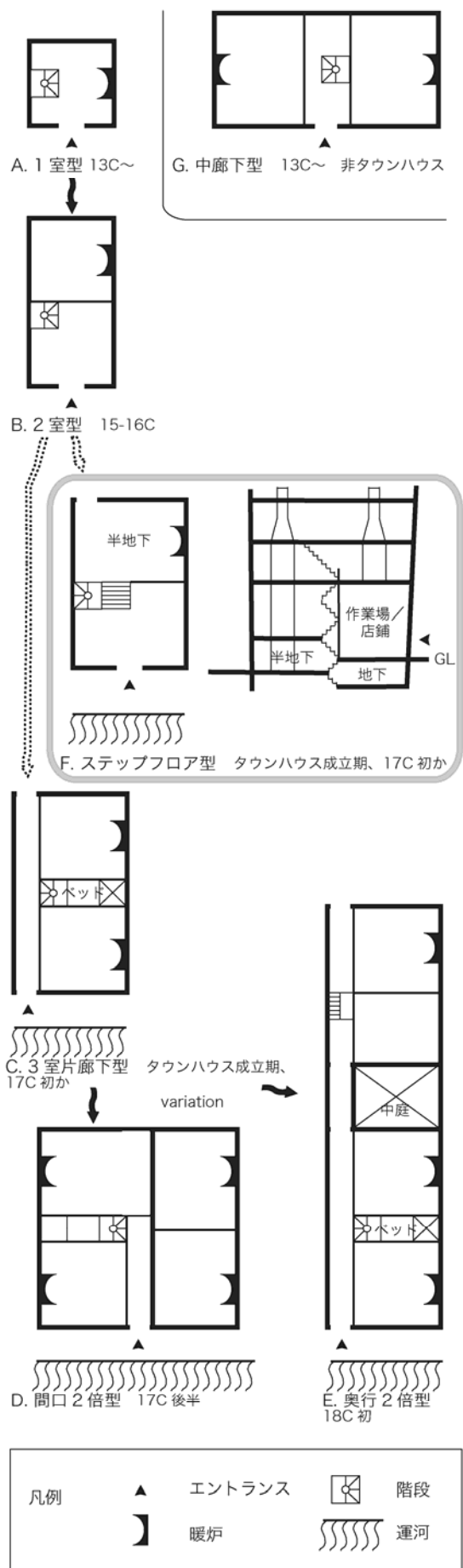


図 3.2.3.1 2 実測調査から導かれた住宅地階平面の 7 類型

D. 間口 2 倍型

妻入、B. のヴァリエーション。通常の 2 倍の間口にわたって建てられており、フリースタントでは数はそれほど多くないが、都市政治に関わる有力者や経済力のある商人の住宅にみられる。スローテン (2009 年度調査) にみられた。

E. 奥行 2 倍型

妻入、B. のヴァリエーション。奥行方向に 2 倍分建てられており、前屋と後屋の 2 棟をつないだ形になっている。前屋と後屋の建設年代が異なることもある。有力な商人などが住んでいた場合が多い。19 世紀から 20 世紀など、人口増加期には前屋と後屋に別世帯が居住していた例もあった。ボルスワルト (2011 年度調査) やレーワルデン、スネーク (今年度調査) でみられた。前項の③、⑩が具体例。

F. ステップフロア型

妻入、入り口は基本的に中央にあり、前室後室部分のフロアにレベル差があり、断面でみるとステップフロアのようにになっている。前後の間に螺旋階段をもつ。前後の室をより明確に区分する性格をもつ。具体的には、玄関から入ってすぐの前室を職人の作業場や商人の店舗として使用し、そこから下がった半地下部分をキッチン、その上のフロアを居室として使う、前室が職業の場、後室が生活の場という性格である。前後にそれぞれ暖炉をもつ。前室地階部分が 1.5 階分に相当する天井高をもつこともある。今年度のレーワルデンの建築調査で数件にみられた。前項の④、⑤が具体例。

G. 中廊下型

A. から F. が妻入で運河に面し他の住宅と並んで建つタウンハウスの類型であるのに対して、G. は平入であり、運河に面していない。都市周縁部のスティンズや農家的要素をもつ住宅、港湾の長の住む家など、特殊な機能をもつ建築である場合が多い。中廊下によって隔てられる 2 室は独立性が高まるため、片方が居住者の生活の場、他方が人々の集会などやや公的な性格をもつ場合がある。各年度においておよそ 1 件ずつみられた。前項の⑪が具体例。

3.2.4 今後の分析に向けた視角—空間・人間活動、空間・社会構造の対応関係—

前項で述べた住宅類型は、現状実測に基づく物理的・空間的なものである。しかしながら、住宅が人間活動の所産であり人間活動の場である以上、住宅の物理的・空間的特徴をその建設者や居住者の歴史と関係づけて考察することができなければ片手落ちというものであろう。今後の分析においては、空間と人間活動、空間と社会構造の関係を探るという視角が重要になる。

史料の偏倚・制約により、どの都市においても等しく確実に居住者の履歴をたどることができるのは 19 世紀前半までだが、公証人記録や財産目録等を利用して 17 世紀前半まで遡れるケースもある。以下に挙げる二つは、現状実測と史料を照合しつつ空間と人間活動、空間と社会構造の相互関係考察にまで踏み込んでいける可能性があるケースである。

(1) ボルスワルトのワイン商の住宅 (図 3.2.4.1 参照)

2011 年度に実測調査した、前面が都市の主要運河に面し、背面が都市の外周運河、側面が支脈運河に面するという、運河と密接な立地関係をもつ住宅。主屋が長大で、3.2.3 の分類でいうならば E. 奥行 2 倍型にあたる¹⁴。前・中・後

14 詳細は 2011 年度アニュアルレポート 3.1.2 を参照。



図 3.2.4.1 Bolsward Grote Dijk 19

部の三つに分かれ、建築年代はそれぞれ 19 世紀半ば〔ファサードに 1843 年の年記あり〕、18 世紀半ば、ごく近年の増築である。

この住宅の空間的特徴は、立地と平面の長大さの他に、前部は地下室とアティックをもち 4 層と、周辺に比較して高層になっている。奥行方向の長大さ・前部の高層性という空間的特徴は、建設者あるいは居住者の活動とどのような関係があったのだろうか。

この疑問に答えるためには、居住者の履歴をたどる必要がある。現時点で入手できる史料は、19 世紀前半にボルスワルトで実施された課税のための人口調査史料（以下、センサス）¹⁵〔実施年は 1827、30、31、32、33、34、37、42 年〕と、出生・婚姻・死亡証明書¹⁶である。センサスには、居住者の姓名、職業、年齢が記載されており、出生・婚姻・死亡証明書からは、生年、両親の姓名、出生地、配偶者とその両親の姓名、婚姻を結んだ者の年齢、結婚を届け出た土地、没年、死亡時の年齢が分かる。これらから、19 世紀前半の主な居住者はワイン商人の Mestag 夫妻とその子供 4 人、1 名程度の若い女性の奉公人であったことが分かった。当住宅は相当大型で床面積が大きいため、センサスに表れない居住者がいたことも推測される。

聞き取りによれば、Mestag はアムステルダムと取引のあった大商人であり、高層の前部と付柱装飾を伴うコーニスのファサード〔1843 年〕は彼〔1842 年時点で当住宅に居住〕が改修・増築したと考えられる。今年度の史料調査（3.4）では Mestag 家の公証人記録や商取引記録史料を Tresoor（フリースラント州古文書館）にて入手しており、史料と空間を照合し分析することにより、彼とその家族の当住宅

における生活、取引活動、経済規模など、空間・人間活動、空間・社会構造を解明していくことができると考えている。

なお、本年度にスネークで実測した 18 世紀末の看板タウンハウス⑩と比較してみると、当住宅も同じく新古典主義様式のデザインであり、ファサード部分のみ高層に見せる点も類似している。⑩のファサード建設者の職業や経済力は現在では不明であるが、18 世紀末から 19 世紀前半のフリースラント都市における大商人とその建築的志向、ファサードデザインのもった意味などを考察する材料になるのではないだろうか。

（2）17 世紀初頭の Leeuwarden における計画的宅地開発

本年度調査では、レーワルデンで 3 棟の 17 世紀初頭の計画的宅地開発による住宅を実測した〔3.2.2 の③、④、⑤〕。

④Eewal¹⁷ 58 と⑤Eewal 60 は、1619 から 21 年にかけて、2 軒同時に宅地開発・住宅建設が行われたことが分かっている。

また、③Eewal 76 は 1610 から 11 年にかけて、74、78 とともに 3 軒同時に宅地開発・住宅建設が行われた。74 と 78 は実測調査を行っていないが、内部を見学し、現在の所有者に聞き取りを行い、史料の複写を頂くことができた。74 に関しては 18 世紀段階にファサードの改変が行われており、内部も改造されているが、痕跡からオリジナルの状態を推定することは可能である。また、78 は 3.2.3 で F ステップフロア型と名付けた類型の典型であり、小屋組や螺旋階段、床材などにもオリジナルと推定される部分が多く残っている。

3 軒同時開発は、レーワルデンの 17 世紀前半の都市図を比較検討して確認することができる（図 3.2.4.2）。まず、1603 年に描かれた Sems の地図を見てみよう。この地図は、測量に基づいて描かれたため、正確で史料としての信頼性が高いとされている。この時点では、現在の Eewal 74、76、78 にあたる土地には建物が建っていない。大きな屋敷地〔Minnemahuis という貴族の居館〕の外縁部にあたる。次に、1616 年の絵図に描かれた当該範囲を見ると、すでに住宅が建ち並び、街区を形成していることが分かる。最後に、1832 年の地籍台帳地図を見ると、土地区画、建物など、ほぼ現状に一致する。

1610 年に Minnema 家地所の開発が決定され、当主はレーワルデン市に Eewal とそれに直交する Minnemastraat に計 12 軒の住宅を開発する許可を申請し、受理された。Eewal 74、76、78 の 3 軒の建築は Dirck Alles というスレート〔屋根葺き〕職人が担当し、78 の敷地は Alles の息子が購入した¹⁸。

当該 3 軒を含む Eewal の住宅は、1611 年の宅地開発時から現在までの居住者を迎えることが可能である¹⁹。オリジナルの状態を推定可能な住宅の空間と、一連の居住者の姓名・職業・売買の金額などの史料情報を照合することにより、以下のような論点に対し分析・考察が可能となる。

- ・レーワルデンにおけるタウンハウスの成立過程
- ・都市の急激な高密度化と計画的開発者の企図、権力。17 世紀初頭の都市エリート。
- ・17 世紀の宅地開発の実態。同時開発の隣接住宅における、居住者の社会階層差と空間構造（間口・奥行等）。

17 Eewal は、元は Ee 川という自然河川であったが、後に都市内の運河となり、19 世紀になって悪臭を理由とする周辺住民の訴えにより埋め立てられ、現在では両側に住宅や商店、レストランなどが立ち並ぶレーワルデンの中心市街の一つとなっている。

18 G.P. Karstkarel, *Leeuwarden 700 jaar bouwen*, Uitgeverij Terra, Zutphen, 1985.

19 Historisch Centrum Leeuwarden のアーキヴィスト、Henk Oly 氏の研究により、課税のための調査記録、不動産売買記録、財産目録史料などが整理されていることは、3.2.2 中で触れた通りである。

15 Bosward については HISGIS 上（<http://www.hisgis.nl/>）1832 年の地籍図と対応させるかたちで利用が可能である。またフリースラント諸都市や農村についての 19 世紀の人口調査記録や <http://www.volkstellingen.nl> にて閲覧が可能。

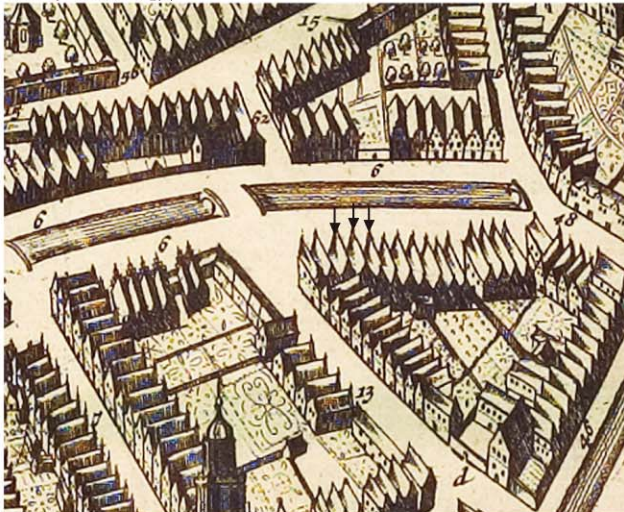
16 <http://www.tresoor.nl/> でデータ閲覧可能。

- ・居住者の生業と室の使用法、改造の傾向
- ・土地所有、家屋所有の変遷と画期

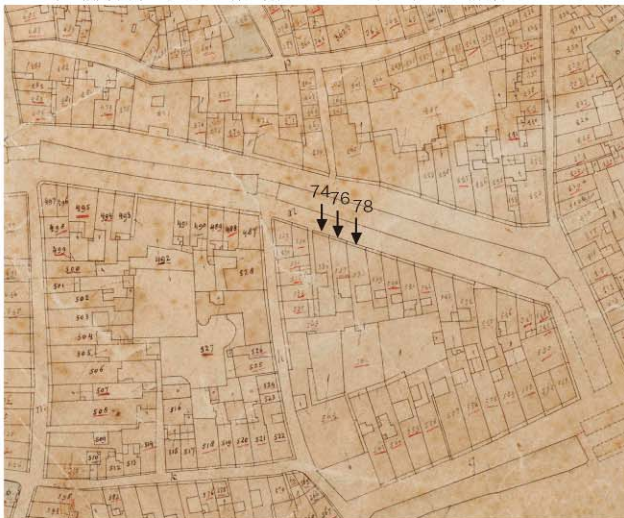
これらの論点を念頭に置き、実測結果をデータ化し各年度蓄積してきた結果と比較すること、各年代の絵図史料を精査すること、課税調査記録・売買記録・財産目録・センサスの文書史料を精査し個別の歴史を記述するとともに、それぞれの史料の対応関係を探ること、その精緻化が今後の課題である。



1603年 Sems の地図



1616年の絵図 矢印で示した3軒が現在の Eewal74、76、78 に相当する



1832年の地籍台帳地図

図 3.2.4.2 レーワルデン 17 世紀の都市図に描かれた Eewal と 19C 地籍台帳地図の比較

3.2.5 スローテンにおける住戸アンケート調査

本項は、昨年度フリースラント州政府に委託した Sloten の全住戸に対するアンケート調査の結果概要を報告するものである。昨年度のアニュアルレポートに掲載できなかったため今年度の報告に掲載する。

Sloten は非常に小規模な都市であるため、このような調査とその視覚化が可能となった。全都市スケールで住宅と外部空間（道、運河、庭）・中間的空間（路地、廊下）について考察する材料であり、各宅地内の建築の配置について考察できる。前項で述べた、空間と人間活動の対応関係についていえば、隣棟関係やサーキュレーションの分析を今後展開させる予定である。

(1) 住宅アンケート結果資料について

・アンケート内容

住居位置のプロット/ 住所/ 居住者名/ 所有者名

Q1. 建築年代及びその情報源

Q2. 付属屋の建築年代とその情報源

Q3. 改修の有無とその時期、箇所

Q4. 入居前の改修の有無とその時期、箇所及び情報源

Q5. 以前の居住者について。(氏名、職業、居住時期)

Q6. 歴史的な建築としての登録の有無

Q7. 本研究会による実測調査の可否

平面、立面のスケッチ

・回答：69 通

濠内の約 1/3 弱の住宅についての情報が得られた（図 3.2.5.1）。昨年度までの調査により実測調査済みの住宅が 9 軒、アンケート回答で平面が分かる 65 軒（内 6 軒重複）、平面の形状は 68 軒について把握できた（図 3.2.5.2）。



図 3.2.5.1 アンケート結果—回答

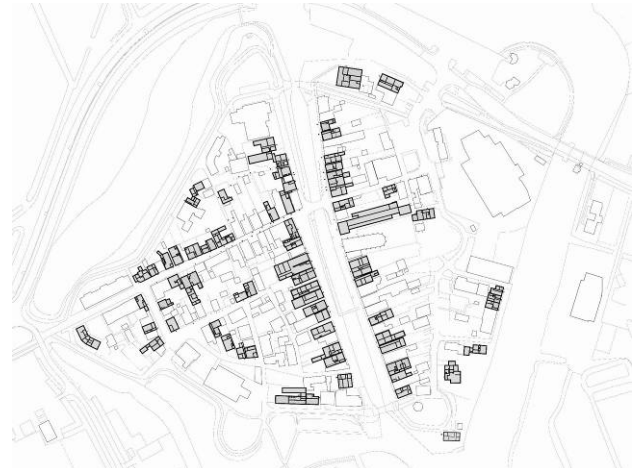


図 3.2.5.2 アンケート結果—平面スケッチ

(2) 住宅の平面類型についての考察

- ・「タウンハウス型」(3.2.3におけるCとD.)と「中廊下型」(3.2.3におけるG.)という二つの住宅類型に注目すると、都市全体では「タウンハウス型」は運河沿いに、「中廊下型」はDubbelstraat沿いに多く見られる。
- ・Dubbelstraat沿いにおけるプランの類型は、205から211番地の建築の外形が似ていることから211番地と同じく「タウンハウス型」が、スケッチから197番地よりも西側は「中廊下型」が並ぶことがわかる。ここから、プランの類型が切り替わる場所と所有形態の切り替わり(領域Y、領域Z²⁰(図3.2.5.3)が一致していることが分かる。
- ・Voorstreek 120は、1581年の絵図(図3.2.5.4)では「ヨコマチ」²¹に属していたが、1610年以降の絵図(図3.2.5.5)では「タテマチ」形式となる。その後、Voorstreek 120に向かって「タテマチ」が延伸していく。前項で触れたように197番地がプランのタイプの切り替わりならば、「タテマチ」「ヨコマチ」の論理と住宅タイプの分布には少なからず乖離がするように思われる。



図 3.2.5.3 スローテンの土地所有分布区分 (X, Y, Z)



図 3.2.5.4 スローテン 1581



図 3.2.5.5 スローテン 1610

20 土地所有の区分については2010年度アニュアルレポート3.3.3を参照。

21 「タテマチ」「ヨコマチ」の類型については2010年度アニュアルレポート4.1.2を

(3) 課題

土地所有 (X1 と Z1 との関係性)、および利用形態、瓦の葺き方、庭の有無など他の資料を参照し、住宅の平面類型とその都市内分布との関係を多角的に検討する必要がある。

3.3 街区・都市調査

3.3.1 二都市の論点と調査方法の検討

本年度の調査二都市は、共にフリースラント州において政治・経済の集中する比較的大きな都市であり、前年度までの調査経験をふまえながらも、これまでとは異なるアプローチが模索された。初めに二都市の調査における論点を確認し、そこから導かれる調査上の方法論について考察を進めたい。

レーワルデンはフリースラント州の州政府が置かれる州都であり、近世から近代にかけて特に地域の中核地点として、拡大・更新された都市で、これまでの調査と比較すると大都市の調査といえる²²。そのため、第一に都市の規模に対する戦略が必要とされた。規模の問題はフィジカルには都市の原初期に形成されたテルプの数や形状として現れる。レーワルデンは考古学の研究者によって複数のテルプが複合して形成されたと考えられており²³、これを現状の微地形を面的に測量することで検証できるかが第一の論点となった。つづいてこの原インフラとしての地盤形成の上に、いかなる都市組織が展開しうるかが第二の論点となる。これまで行ってきた街区調査では、都市内の選ばれた街区を都市スケールの屋根伏図として、宅地を一つのユニット(宅地類型)とみなし調査していたが、レーワルデンの調査では都市域の中の街区スケールのあり方に着目し、都市内の広域なエリアがどのような街区で構成されているのか、すなわち街区類型を把握することでその全体像を明らかにすることを企図した。

他方、スネークは旧市壁内の範囲は昨年度調査を行ったドックム、ボルスワルトと同程度の規模であり、その規模は調査上の論点とはならない。むしろ関心を引いたのはスネークが泥炭質と粘土質の中間地帯に位置しながら、比較的大きな都市に発展できた点であった。州北部のレーワルデンやドックムが比較的に安定した海洋性粘土質の土地に形成された都市であり、スネークの泥炭質土壌とではその都市形成に差異が生まれて然るべきである。一般に泥炭質土壌では地盤沈下が起こりやすく、またそれにとまなう排水の問題は避けがたい。こうした不安定な都市地盤の問題をいかに解決してきたか、これがスネークの大きな論点となると予想された。地盤上に展開された都市の空間構造の解明に加え、土壌という地中の問題を地表面上の観察・測量を通していかに可視化できるかが調査の大きな課題となった。

3.3.2 レーワルデンの都市調査

レーワルデンの都市調査は9月19日から22日にかけて、①街区類型調査、②地形調査の異なる二つの調査を行った。

参照。

22 フリースラント州政府の発行する資料によると2009年時点で人口9万人超。参考URLは次の通り。

http://www.leeuwarden.nl/sites/leeuwarden.nl/files/media/pdf/definitieve_versie_brochure_a-5_formaat1.pdf

23 De Langen, Gilles, "On the Origin and Shape of Medieval Villages and Towns in Friesland, the Netherlands: The Settlement Structure of Leeuwarden 450-1435 AD.", in *Space, Culture, and Regeneration of Cities in History*, ed. Society of Urban and Territorial History, Takeshi Ito Laboratory, Department of Architecture Graduate School of Engineering The University of Tokyo.

以下、図 3.3.2.1 を参照としながら調査の概略を紹介する。調査の対象としたエリアは主に 1300 年の時点で堀に囲まれていたとされる旧市域で、現在まちの中央を横切る Ee 川の北側のエリアである。なお②の調査は、16 世紀以降の時代と比較するため Ee 川南側のエリアも一部調査した。

①の街区類型調査では、調査エリアを A、B、C の三つに分け、2 人程度が組となって担当するエリアを観察・測量した。各組が注目した要素は、間口寸法・道幅寸法・建物要素（地下室の有無、ゲープル形状、階数）・街区内の空地寸法である。主に道路面側からの観察可能な範囲で調査されたが、可能な限り街区内の空地の情報も計測した。これら現地で観察した要素を総合的に考察し、第一に、各々の街区の特徴からレーワルデンにおける街区類型を

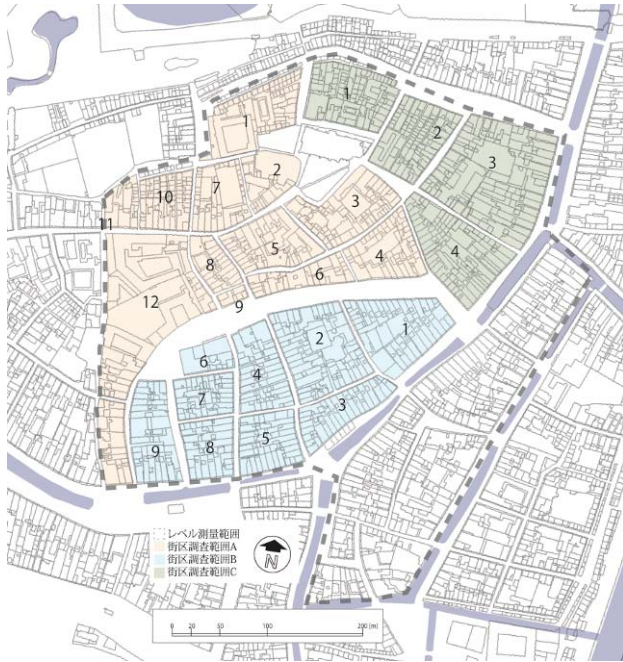


図 3.3.2.1 レーワルデン調査エリア概要

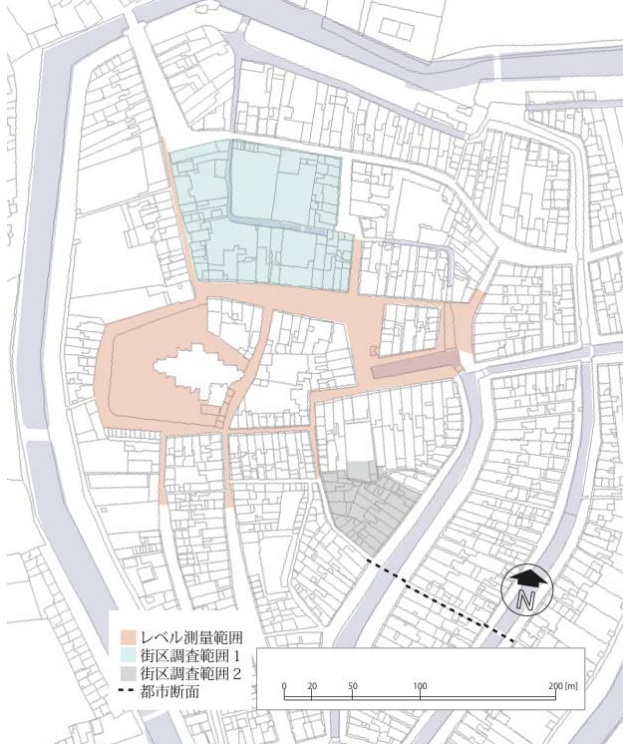


図 3.3.3.1 スネーク調査エリア概要

示し、その全体像（中心・周縁・軸等々）を描き出したい。また特徴的な街区に注目し、その成り立ちから今日に至るまでの変遷を明らかにしたいと考えている。

②の地形調査は、道路面の相対高さをレベルにより測量するもので、図 3.3.2.1 に示されたレベル測量範囲の道路面全体を面的に計測した。こちらはデータの図面化ののちに現在のレーワルデンの地盤面から土地造成の規模や過程について考察を進めたい。

3.3.3 スネークでの都市調査

スネークの都市調査は 9 月 24 日から 28 日にかけて、①屋根伏図を中心とした二つの街区調査と、②街路や広場の地面の高さを面的に調べる地形調査、③建築とインフラを含む断面図調査の三つを行った。調査範囲は図 3.3.3.2 に示す。

①の街区調査はまずまちの中心の Martini 教会（旧カトリック教区教会）の北側のエリアで現在市庁舎が建つ街区で行った。ここでの論点は旧教区教会のテルプ縁辺部で原初期は低湿地であったと考えられるエリアが、スティンズ（石造の館）の建設者、都市に入り込んだ托鉢系修道会といった社会権力によってどのように土地開発されたかという問題である。もう一つの調査対象地は、中心からみて南東部の運河と細い路地に囲まれた建物密集地区である。中世期から商人が居住したと考えられるスネーク最初期の運河に接し、かつ裏路地が走ることで土地が不整形に分割され、形態的に非常に興味深い場所といえる。

②の調査はこれまで道路面全体を道路の中心ラインの高さに近似し測量していたのに対して、より細かくメッシュ状に測量点を配し、広がりのあるスネークの街路空間の微地形を精緻に考察することを目的としている。

③はフリースラントの他都市にも見られる＜運河―街路―主屋―倉庫＞と並ぶ 16 世紀以降の典型的な断面配置を立面的に読み取ろうとしたものである。スネークの 16 世紀以降の中継都市としての発展を建築的に示すものと考えられる。

3.3.4 今後の分析視角

(1) レーワルデン

レーワルデンの調査では上述の二種類の都市調査（①街区類型、②地形）を行ったが、現時点では分析作業はまだ途上である。特に②に関してはデータの図面化が済んでいない現時点では何も述べられない。ここでは、①の街区類型に関して、若干の指摘を行うにとどめたい。

はじめに街区全般に関して、街区をなす四辺の“固さ”に注目する見方が提示できる。当然ではあるがひとつの街区は各辺が均質であるはずはなく、それぞれの辺が面して

いる街路・運河・広場などの性格によって違いを見せる。時にはその辺に存在する建築や建築群がその辺全体の性格を規定することもありうるだろう。いわゆる“表”通りとされる面においては、建築群は隙間なくたち、ひとつの町並として完結した印象（固い辺）を与え、“裏”側あるいは“横丁”とされる通りにおいては変化が未完了で、流動的・粗放的な様相（柔らかい辺）を示すことが一般に想像されるだろう。しかし時には“裏”側と考えられる場所であってもある計画意図によって“固い辺”をなすこともありえ、またその逆もありうるだろう。そのため、＜表側＝固い＞／＜裏側＝柔らかい＞と単純化することはできない。

こうした視点によって各辺の個別性に着目する一方で、それら各辺は一つの街区の一部をなす、すなわちその街区に属しているという問題も同時に考察しなければならないだろう。

以上の観点からレーワルデン全体の街区の辺を<表／裏>と<固い／柔らかい>に分類し図示したものが図 3.3.4.1 である。現時点では<表／裏>と<固い／柔らかい>の判断についての曖昧さを残すが、レーワルデン全体の都市構造の特徴を示しており、興味深い。固い面に着目すると、四面が固まった「口の字型」、三面の「コの字型」、平行する二面の「ニの字型」、隣り合う二面の「くの字型」といった街区の類型化が可能となる。またそれら類型の分布には都市の中心と周縁、表裏、軸線の重なりや複合といった問題にある切り口を与えるだろう。今後の分析につなげたい。

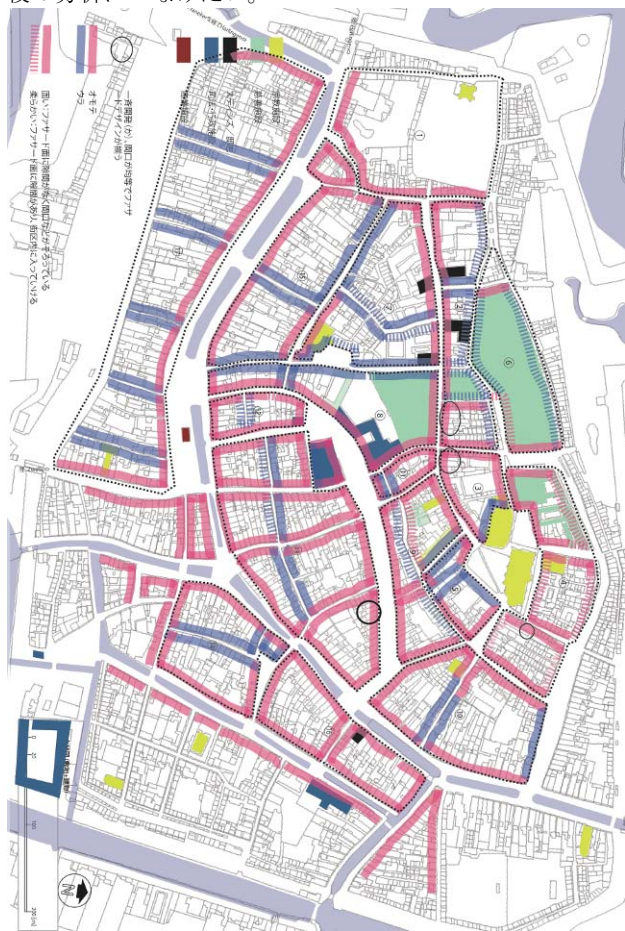


図 3.3.4.1 レーワルデン街区類型の分布

(2) スネーク

スネークの都市形態からは、単一の教区教会テルブを中心に北・東・南の三方向に都市域を拡張してきた歴史が読み取れる。これら三方向の都市組織のあり方は形態的に全く異なり、それぞれの異なる来歴を反映したものと考えられる（図 3.3.3.2）。しかしながら、最古の絵図史料とされる 16 世紀のデーフェンテル絵図（図 3.3.4.2）に描かれた時点で、既に現在の旧市域（外堀の内側）は成立しており、絵図史料から図的にスネークの形成過程を追うことは難しい。そのため教会を中心として三方に広がる都市空間がどのような部分から成り立っているか、またそれぞれの部分の性格について、多角的に考察する必要があるだろう。ここでは今後の分析にいかされるであろう、これまでの分

析方法ならびに素材となる史料を概観し、今後の分析視角を提示したい。

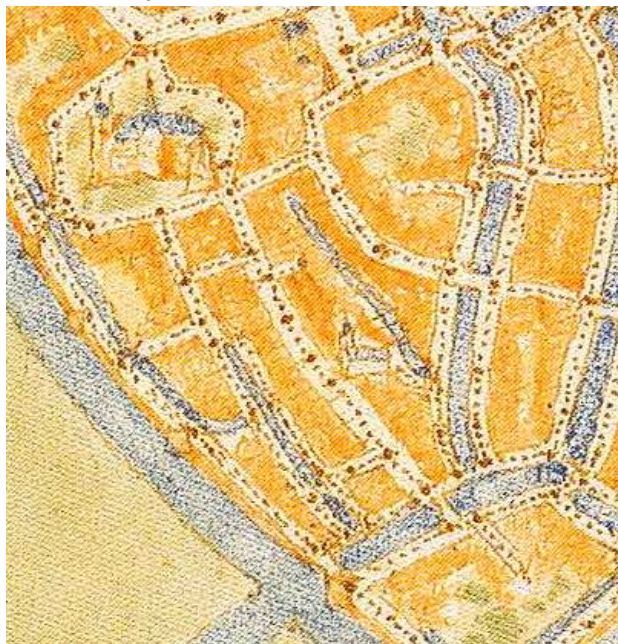


図 3.3.4.2 デーフェンテル（16c.）によるスネーク南東部

これまでに行ってきた分析の中でも有効と考えられるのは、2011 年度に報告したドックムの地形分析がまず挙げられる。これは現地での地形測量に加えて、考古学者が行った発掘調査の成果と合わせて土地造成のプロセスを明らかにしようとしたものである。スネークの教会テルブはドックムのものと比較して、高低差は緩やかであり、微妙な凹凸を持ちながら広がっている点が特徴的である。とりわけ測量範囲東側のエリアは行き止まりの運河が引き込まれたエリアですり鉢状にくぼんだ沼地形となっており、他都市に類例がない部分である。こうした微地形はテルブ上の土地を分節するきっかけとなる、あるいは分節的に造成された結果を示していると考えられる。

また、2010 年度に報告したスローテンの土地所有分析は、一見して対称に見える都市形態の中に土地所有の主従関係が存在することを示したもので、このような所有関係の分析を行うことでスネークの各エリアの相互関係を明らかにできる可能性がある。とりわけ教会南東部の不整形に路地が走るエリアは、主要な運河に面して初期から商人が居住するエリアであったと考えられるが、その細かな土地分割から想像するに、裏側には職人や労働者など比較的貧しい階層の人々が共存した可能性がある。近代初期の 19 世紀前半の地籍台帳が現在利用可能であり、19 世紀段階の土地所有構造からスネークの社会空間の特質を明らかにするきっかけとなるだろう。またそこから浮き彫りとなる社会空間をこれまで分析した他都市と比較することも重要となる。

最後にスネーク固有の論点となりうる点を確認したい。スネークはボルスワルト、ドックム、レーワルデンの古都に比べると時代的に少し遅れて発展した都市に分類される²⁴。それは泥炭質の土地に立地し乾いた土地を容易に創出できなかったことと少なからず関連があるだろう²⁵。こうした沼地的な土地が改良されるきっかけはおそらく、教会テルブ北部を東西に横切るヘムダイクの建設（11-12 世

24 De Bosatlas van Fryslân, Centraal Boekhuis, 2009, pp. 116.

25 Cfr. Meindert Schroor (hoofdredacteur), *SNEEK van veenterp tot waterpoorstaad*, Leeuwarden, 2011,

紀と推定)であるだろう。ここに現在の Markt Straat (市場通り) すなわち市が立つ幅の広い街路が誕生したことは、スネークの中世期の商業的繁栄を物語る上で重要と思われる。スネークの道路名はヴァリエーションに富んでおり、マルクト Markt やブルフ Burg という地名が多く見られる²⁶。これらは中心部の教会東部に集中しており、活発な商業活動を物語るものだろう。これまでの調査では積極的に都市の商業活動に注目してこなかったが、スネークを論ずる上で重要な視点となるはずである。

3.4 資料調査

本年度調査では、杉浦未樹と高橋元貴を中心に史料・文献調査を実施した。おもな目的は、古文書館における収蔵史料の把握と前年度までの分析作業に加えての補足史料や新たな研究素材の収集である。以下、訪問した古文書館および史料調査日程についてまとめ、それぞれにおける収集史料などについて簡単に述べる。

9月19日

- ・ Oud Bolsward Archief (ボルスワルト市古文書館)
- ・ Henk Oly 氏へのインタビュー

9月20日

- ・ Tresoar (フリースラント州古文書館)
- ・ Historisch Centrum Leeuwarden (レーワルデン市古文書館)

9月21日

- ・ Tresoar (フリースラント州立古文書館)
- ・ Historisch Centrum Leeuwarden (レーワルデン市古文書館)

9月23日

- ・ Historisch Centrum Leeuwarden (レーワルデン市古文書館)

(1) Oud Bolsward Archief

2011年9月の調査都市であるボルスワルト市の古文書館であり、15世紀から20世紀にわたる史料が収蔵されている。古文書館にて作成された資料目録を入手した。また18世紀における不動産関係史料や17世紀における都市間の曳舟水路'Trekvaart'に関する文書などを収集した。

(2) Tresoar

フリースラント州立古文書館であり、さまざまな文書史料や絵図史料などを所蔵している。今回は、今年度までに実測調査を行った住宅リストをもとに、それぞれの19世紀における家(所有者)にかんする公証人記録、とくに不動産(家屋・土地)の売買に関する記録を中心に史料を収集した。

(3) Historisch Centrum Leeuwarden

レーワルデン市の古文書館である。古文書の多くは目録のデジタル化が行われており、Web上にて検索が可能となっている。(2)に加えて、本年度実測調査を行った住宅やレーワルデンにおける家について史料調査を行った。とくに17世紀以降の家屋売買にさいして記録された財産史料'Concent Boek'などは当時の住宅内部の様子をうかがうことができる貴重な史料といえ、17世

紀以降の都市化における家屋・土地の動向を知るための史料としても有用であると考えられる。

(4) Henk Oly 氏へのインタビュー

事前に質問項目を伊藤研および杉浦によって作成し、それにもとづき調査や分析作業についてのアドバイスをいただいた。また、史料の所在や文献、研究動向などをご教示いただいた。

4. 今後の展開と課題

本調査は年を追うごとに議論が深まり、扱う領域が拡大し、収集されたデータは膨大な量に及ぶ。いよいよ研究も大詰めにさしかかり、それをまとめ上げるにあたって、議論の焦点を絞り、取捨選択をした上でテーマに沿った整理を行う必要がある。その絞り込みの段階で、さらなる調査が望まれる領域や、あらためて史料を整理し、検討を加えるべき部分が見えてきたといえる。

個別の項目における今後の課題は前述したとおりなので、ここでは大きなフレームとして、領域やスケールを横断的に考えるべき論点を以下に記す。

まず基本的なこととして、フリースラントの都市とはオランダの諸都市の中でいかなる位置を占めるのか、といったことが再確認される必要がある。オランダの都市構造は、他のヨーロッパ型都市とは異なったものであり、その中でもフリースラントは、小規模の都市群が水路でつながれるといった特異な構造をもっている。このことをいかに位置づけるかが今後の一つの課題である。

そして、このような広域ネットワークのなかで各都市がいかなる役割を果たしたのか、そのインフラはどのような水路・道路によって構成されるのか、及び建設にはどのような社会集団が関与したのか、さらなる分析が望まれる。

また、フリースラント諸都市は中世段階での状況を分析することは困難であるが、絵図の分析や地籍図と地形の分析から遡及的・仮説的に中世、ひいては発生段階の都市状況を明らかにする試みは、今後の深化・発展の可能性をもっている。それらを基礎づける形態的な情報は、実地における実測調査に基づいており、現在の状況に空間の継続性をみる意味でも、重要な論点といえる。

上記の点を踏まえた上で、都市とは何か? という問いに答えていく必要があるだろう。また、その観点から、フリースラントの中に中世都市、もしくは近世都市のような時代区分で捉えることのできる都市像があるのかどうかについて再検討すべきである。そのためには、11都市に対する都市特権付与の意味を今一度考えることに加えて、経済的、政治的な背景も念頭に置きつつ、都市間の比較分析を行なっていかなければならない。

26 <マルクト>の例は、Markt Straat (市場通り) に加え、De Koe Markt(牛市場)、Schaapen Markt (舟市場)、 Zuip Markt (酒市場)、Wortel Markt (ニンジン市場) など。<ブルフ>の例は Kroonen Burg (冠ブルフ)、Uilenburg (フクロウブルフ)、Leeuwen Burg (ライオンブルフ)、Vinken Burg (アトリブルフ)